



旧レオ氏郷南蛮館にあった「泰西王侯騎馬図」屏風（レプリカ）

キリシタンと会津

～祈りの光と影～

Aizu and Christianity: The Light and Shadow of Faith



キリシタン塚

仏都会津の象徴ともいえる慧日寺

会津にはおおらかな
仏都の祈りの影に、
潜伏キリシタンの
隠れた歴史があります。
会津各地に残るキリシタンの
痕跡を訪ねます。

In the shadow of Aizu's serene Buddhist tradition, there lies an undiscovered history of Hidden Christians. This report examines traces of Christianity that can be found in various places around Aizu.

キリシタン関連地図（会津若松市街）



キリシタン巡りの小さな旅

【行程】

①市役所↓②鶴ヶ城（鐘つき堂石垣）↓③宝積寺（キリシタン地蔵）↓
④建福寺（松倉重頼主従の墓）↓⑤泰雲寺（花クルスの石灯籠）↓⑥蒲
生秀行廟↓⑦天子神社↓⑧キリシタン塚↓⑨蒲生忠郷の墓（高厳寺）
↓⑩蒲生氏郷の墓（興徳寺）↓市役所

キリシタン関連地図（会津広域）



【参考文献】

『会津若松市史4・城下町の誕生』・『猪苗代町史
～歴史編』・『河東町史』・『下郷町史』・『会津のキ
リシタン』山内強著・『会津切支丹物語』小島一
男著（会津史談会）・『郷土の姿』山中喜巳男著
（自費出版）・『会津のキリシタン』アーミン・ク
レーラ、エヴェリン・クレラ著・『日本関係イ
エズス会原文書（京都外国語大学附属図書館所
蔵）』松田毅一、他編（同朋舎）・『東北のキリシ
タン殉教地をゆく』高木一雄著（聖母文庫）

会津若松観光光ネッサンス協議会

事務局／会津若松市観光課（会津若松市東栄町3-46）

構成：庄司 裕（企画キャップ）／協力：佐藤 芳哉（諸橋近代美術館学芸員）

■令和2年度 公益財団法人東日本鉄道文化財団支援事業

2021年 3月 初版
2021年11月 改訂第2版

時代区分	安土桃山時代			江戸時代
支配下年代	一五八九年	一五九〇年～一五九八年	一五九八年～一六〇〇年	一六〇一年～一六二七年
会津領主	伊達政宗	蒲生氏郷・秀行（前期）	上杉景勝	蒲生秀行・忠郷（後期）
				加藤嘉明・明成
				一六四三年～一六七二年
				保科正之



蒲生氏郷画像（複製）市立会津図書館蔵

会津はかつて京都、奈良に次ぐ「**仏都**」であつたといわれ、「会津の十三観音めぐり」巡礼を通して見た往時の会津の文化」が、2016（平成28）年に日本遺産に認定されました。その一方、1590（天正18）年に戦国武将、蒲生氏郷によって会津にもたらされたのがキリスト教で、三十三観音めぐりという庶民のおおらかな信仰が「光の祈り」とすれば、迫害と殉教のキリシタン史は「影の祈り」と言えるかもしれません。この報告書では会津各地で見られる影の祈りの痕跡を訪ねます。

In the past, Aizu was recognized alongside religious centers like Kyoto and Nara as a “Buddhist Capital,” due in part to the Aizu 33 Kannon’s Tour, a historic pilgrimage which was designated as a Japanese cultural heritage asset in 2016. Around the same time as the tour’s initial rise to popularity, the warlord Gamo Ujisato brought Christianity to Aizu in 1590. The leisurely 33 Kannon’s Pilgrimage and other Buddhist practices claimed the spotlight among common people, while a history of persecution and martyrdom kept Christianity in the shadows. This report examines remnants of Aizu’s “shadow faith,” which can be found scattered across the Aizu region.

会津におけるキリシタン文化の芽生え

海外交易と信仰の広がり

1549（天文18）年にポルトガル人フランシスコ・ザビエルによって日本にもたらされたキリスト教はまたたく間に九州、西日本から中央に広まっていきました。その教えが東北地方に入るのは約40年後の1590（天正18）年のことです。普及に貢献したのが、豊臣秀吉の命で会津の領主になった蒲生氏郷です。氏郷は利休七哲の筆頭に数えられる一流の茶人であり、熱心なキリシタン大名でもありました。洗礼名はレオ氏郷。高山右近の強い勧めによって1585（天正13）年に大阪で洗礼を受けました。『日本史』を書いたルイス・フロイスの当時の記録によると、高山右近や氏郷のほ

かに小西行長、黒田官兵衛（孝高）ら秀吉配下の名だたる武将がこぞつて入信しています。当時、伊勢・松坂の領主だった氏郷は家臣たちに自分がキリシタンであること、領内に教えを広めたいことを明らかにしたといえます。またローマ法王に4回にわたって使節を派遣したという伝説も残っています。入信の動機は、多くの大名たちと同じように、海外との交易による富の獲得、あるいは西洋文化の導入などのねらいがあつたと思われませんが、氏郷の信仰はしだいに強くなっていったといわれています。

世界文化遺産の長崎と会津

2018（平成30）年7月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン

蒲生氏郷時代→加藤明成時代

キリシタン文化の広がり

会津の領主となった氏郷は、黒川の地名を若松に変え、7層の天守閣を築くとともに、城下町を整備しました。中心市街地に今に残る互い違いの十字路は氏郷時代の遺構です。漆器や酒造、会津木綿、赤べこに代表される張り子玩具といった伝統工芸品などの産業振興にも力を入れ、現在も伝統産業として息づいています。



悲しみのマリア像(仙台市博物館蔵)



旧レオ氏郷南蛮館内に再現した天主の間(想像)

鶴ヶ城に保管され、現在はサントリー美術館と神戸市立博物館に収蔵されている「泰西王侯騎馬図屏風」や仙台市博物館にある「悲しみのマリア像」です。

キリスト教 影の祈りへ…

しかし江戸時代になると、1612（慶長17）年に幕府からキリスト教禁止令が出されました。会津ではとくに加藤明成時代に厳しく禁止されました。多くは棄教し、転切支丹^{てんせつしだん}類族^{るいぞく}となりま

したが、地下にもぐって信仰を続けた領民も少なくありませんでした。隠れキリシタンは子安観音や如意輪観音などの観音様を隠れ蓑^{いりかんのかん}にして信仰の対象としました。その痕跡ともいえるものが会津各地に残っています。洞穴のなかに礼拝所を設けたと思われる場所もありました。現在は立ち入ることができませんが、飯盛山^{いもりやま}山頂

近くにある謎の洞穴がそうだと いわれています。幅が約1 m、壁や天井にはきれいなノミの跡が残っていました。最深部は水没していて、その奥がどうなっているかは不明でした。遺物らしいものは何ひとつ残っていません。何のために掘られたのか謎ですが、郷土史家の故小島一男氏は隠れキリシタンの礼拝所との見方をしていました。以前調査した鉾山技師の話では専門の探掘夫によって掘られたものだったのではないかと いいます。近くの石ヶ森金山の坑道と掘り方が酷似しているそうです。鉾夫に隠れキリシタンが多かったという点も礼拝所説の根拠になっているようです。

キリシタンの痕跡は会津藩預かりの幕府直轄領だった南会津地方にも多く見られます。田島南山城の城代小倉作左衛門が熱心な信者だったことも影響したのでしょう。次ページでは会津各地に点在する主な痕跡を紹介します。

※「転切支丹本人」のほかに親が棄教した場合、未成人子供を「転切支丹本人」と称した。転切支丹類とは本人、子、孫、曾孫、玄孫までをいう。江戸時代はそれだけキリシタンに厳しかった。檀家制度は江戸幕府のキリシタンを取り締まるために制定された宗教統制策ともいわれる。



蒲生秀行廟（館馬町）



興徳寺にある蒲生氏郷の墓



三代蒲生忠郷の墓(高蔵寺北)

キリシタン大名の顔を持つ氏郷のキリスト教への信仰心がいかに深かったかを物語る話が伝わっています。1587（天正15）年、秀吉は突然、伴天連^{はてれん}追放令を出しました。高山右近に信仰をやめるように命じましたが、右近はこれを拒絶しました。氏郷は右近の一途な良心に感動

会津に広まるキリスト教

し、来日したヴァリニャーノ神父に2度面会し、将来、領内でキリシタン伝道に尽力することを誓ったといえます。会津領主になった氏郷のもとでジョアン郷成^{なご}など重臣たちも敬虔なキリシタンになりました。その一人、氏郷の妹を妻にした小倉作左衛門^{おぐらさくざえもん}は洗礼名をパウロと称し、南会津を治めました。蒲生家の重臣の一人で、氏郷の孫・忠郷時代に猪苗代城代を務めた岡越後^{おかごし}（左内）もまた熱心な信者でした。忠郷時代にはかなりの数のキリシタンがいたとも伝えられています。会津におけるキリシタン文化を彷彿とさせる代表的なものは、かつて

激しさを増す弾圧

殉教者が相次ぐ

蒲生氏郷によってもたらされたキリスト教は寛大な領主に恵まれ、信者は会津全域にまで広まりました。しかし江戸期に入り、加藤明成が領主になるとキリシタンに対する弾圧は激しくなり、殉教者が相次ぎました。長く暗い時代を迎えたのです。なかでも1635(寛永12)年の大弾圧は痛ましいものでした。会津キリシタンの指導者だった横沢丹波は布教のために南会津町水無に出かけていたところを捕らえられました。丹波家の二重壁に潜んでいた外国人バテレンなど60余名のキリシタンも一緒に捕まっています。なかには女子、子供も混じっていたそうです。

「刑は12月17日から20日にかけて、薬師堂河原の刑場で行われた。丹波は18日に執行、南無阿弥陀仏の六字の名号をつけた白衣を着せられて逆さ十字にかけ

られた。20日には外人バテレンが逆さはりつけに処せられたが、普通の日本人なら2日で絶命するの

に、この外人は26日夕刻まで生存し、見物人に強い感銘を与えた。外人の着ていた衣服は戊辰戦争まで城内に残っていたが、戦い

のとき焼失してしまっ

た」(『切支丹風土記』)

丹波、バテレンのほかにパウロ柴山長左衛門は火あぶりの刑で、その妻と二人の子供は打ち首によって刑場の露となりまし

た。薬師堂河原の刑場跡に「キリシタン塚」が立っています。「キリシタン塚」の南、湯川に架かる橋を柳橋、別名「涙橋」ともいいます。罪人が刑場に連行されるときに、この橋が家族との最後の別れになるからです。



「キリシタン塚」は神指町黒川に架かる涙橋の北、湯川辺りにある



湯川に架かる「涙橋」

禁教の中の温情

保科正之時代

命を尊ぶ正之公

保科正之が1643(寛永20)年に最上(山形)から会津に入封した際、一緒にいてきた家老大田小太夫実次は熱心なキリシタンでした。命を尊び、キリシタンにも比較的寛容だった正之は大目に見ていたようです。とはいえ幕府の手前、名を谷野又右衛門と改名させ、太田を帰農させたそうです。帰農した谷野は上荒久田で青芋(からむし)

の栽培を始めましたが、土地が合わなかったのか、別の場所に元家臣ともども移住しました。帰農した際、表向きは棄教したとも考えられます。会津若松市町北町上荒久田の谷野家屋敷跡に「天子神社」が建っています。



谷野家に伝わるキリシタン遺品の旗

取締りと恩赦

島原城主松倉重政の弟で次の城主になるはずだった松倉重頼ですが、1637(寛永14)年10月に起きた島原・天草の乱の責任を問われ、幕府の命で追放されました。重頼の身柄を預かったのが会津藩主保科正之でした。正之は丁重に処遇していました

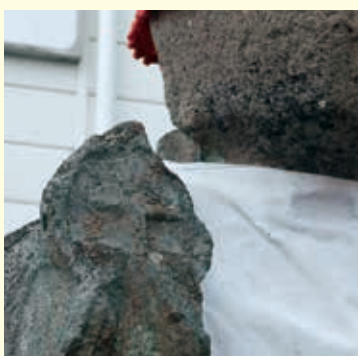


松倉重頼主従の墓(会津若松市建福寺前)

会津若松に残るキリシタン伝承

宝積寺キリシタン地蔵

(会津若松市花見ヶ丘)



お寺の門柱前に立つ地蔵が手に持った錫杖の頭に十字のマークがあります。住職の話ではキリシタンの印として伝承されているそうです。

石垣に彫られた十字

(会津若松市追手町)



鶴ヶ城鐘撞堂の石垣に彫られた十字(タテ11cm・ヨコ6cm)。石工がキリシタンだったという説と石積み工事の際の目印だったという見方もあります。本丸内の旧御三階跡北東の石垣にも同じような十字の彫り跡が見られます。

泰雲寺の花クルス石灯籠

(会津若松市門田町面川)



十字に切った窓

会津若松簡易裁判所にある白露庭は会津藩家老内藤家の庭園です。藩主保科正之の側近であった初代内藤自卓は弟とともにキリシタンだったといわれています。内藤自卓の墓は菩提寺である門田町面川の泰雲寺墓地にあります。墓の前に一對の石灯籠が建てられています。正面から見ると何の変哲もない石灯籠ですが、裏から見ると灯籠の火袋に花クルスの窓があり、あるいはキリシタンとの関連があるかもしれません。

本泉寺のマリア観音

(会津若松市北会津町本田)



本泉寺は会津美里町の旧新鶴村に近い本田集落のはずれにある真言宗の寺院です。旧下荒井村蓮華寺の末寺にあたり、現在は無住。創建は会津大地震のあった一六一(慶長16)年。堂内に安置されている身丈18cmの子安観音を何時のころからマリア観音と称されてきたのかは不明です。厨子に入った光背が舟形雲漆箔仕上げの観音像にクルス(十字)らしきものは見当たりません。江戸時代に提出された陸奥国転切支丹類族存命帳に「下荒井一人金三郎」といった記述がありますが、あるいは本田のマリア観音と関連があるのかもしれない。本泉寺は普段は閉じられていますが、8月24日と25日の集落の祭礼の際にご開帳され、拝観することができます。

キリシタン位牌

(会津若松市河東町大和田)



猪俣善左衛門 夫婦の位牌

宝勝寺に納められている位牌の中に、黒漆塗りに朱漆で戒名が記され、裏に二月初四日 猪俣善左衛門「六月初八日 同妻」と併記されています。善左衛門の死亡は1818(文政元庚)年裏面の笠と本体の上、表面の台の上の3ヶ所に「ナ」とも「十」とも見える金文字が書き込まれています。村の記録に「猪俣親郷は町和田に二百石の地を拓いた。その子善左衛門はキリシタンなり」とあります。位牌は善左衛門の子が父のために密かに作ったものなのでしょうか。

猪苗代は キリシタンの聖地だった

殉教の地

猪苗代町にキリシタン信者が多かったのは、蒲生時代に亀ヶ城主で猪苗代城代を担った岡越後が敬虔なキリシタンだったからともいわれています。越後は城代に着任すると城下を一望する磐梯山麓の見瀬山に宣教師を建て、宣教師を招いて信者の教育にあたらせました。亀ヶ城の東に布教のための教会を建てました。

1611（慶長16）年10月、イ



キリシタン殉教地碑は磐梯山のふもと、土津神社近くにある

スパニアの使節セバスチャン・ビスカイノが東北巡行の途中、会津を訪問し蒲生秀行に接見しています。越後が猪苗代城代を務めている間、猪苗代はキリシタンの最盛期を迎えますが、1622（元和8）年に息子が病死すると、後を追うように越後も急逝してしまいました。

その後、城代に着任したのは越後の甥ともいわれる岡左衛門佐でした。かつてはキリシタン信者でしたが、棄教してからは一転してキリシタン弾圧に精力を傾けました。岡越後の消息ははっきりとわかっていませんが、土津神社の下

猪苗代町内中心部にある神学校の跡、天司の宮

にあるキリシタン殉教地碑が岡越後の墓といわれています。

天司ケヤキ伝説

猪苗代の市街地に天司の宮と呼ばれる小さなお宮と小さな石像が大ケヤキの根元に寄り添うように立っています。このケヤキには伝説があります。昔、このケヤキには兄弟があつて、一本は猪苗代湖に近い場所に立っていました。事情があつてこのケヤキが切り倒されることになりました。木こりが斧

を振り上げてハッシと打ち込むと、何と切り口から赤い血が流れ出て止まらなかつたといいます。不思議な現象は町の中にあるもう一本のケヤキにも起こりました。兄弟ケヤキに斧が打ち込まれたその時、ガタガタと鳴動して止まず人々を驚かせました。鳴動したケヤキの立っていた場所は岡越後が建てた教会のあった場所だとい

います。これが天司のケヤキです。

奥会津に残る キリシタンの刻印

常楽院のマリア観音 （南会津町福米沢）

額に十字が彫られています。建前上は子安観音として信仰されてきました。常楽院のすぐ近くに明治初期に建てられた教会があります。明治以降、会津のキリスト教布教がどこよりも早かつたのは、会津に内在する芯の強さと反骨心、あるいはやさしさといった気風が脈々と流れているからでしょうか。



常楽院のマリア観音

久保田三十三観音 （柳津町久保田）



マリア観音

七番の如意輪観音像は錫杖に十字をもつマリア観音といわれています。久保田集落から銀山峠を越えると軽井沢銀山です。鉱山は幕府の目が届かず、鉱夫に隠れキリシタンが多かつたといわれています。

水無の子安観音 （南会津町水無）

栗生沢の手前にある水無集落は会津キリシタンの指導者だった横沢丹波らが捕まった場所です。この集落の墓地にある子安観音は昭和初期に土の中から発見されたもので、十字の印はないものの、迫害を逃れて土に埋めたのではないかと想定されます。

栗生沢集落の墓地の マリア観音 （南会津町栗生沢）



集落の墓地にある観音像

栗生沢は村人の多くがキリシタンだったといわれています。マリア観音と目される観音像は高さ約70cmで両手に如意輪のようなものを持っています。腹部に5つの穴が十字形に配列されていますが、十字を表現したものとも考えられます。



常楽院



早くも明治初期に建てられた教会



久保田三十三観音の入口



水無の子安観音



南会津地方で発見されたイコン